The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	幕末から明治初期の英文法書にみる概念、文法用語の変遷Passive Voiceに纏わる変遷について
Author(s)	佐古, 敏子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2015, 2014, p. 57-70
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54557
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

幕末から明治初期の英文法書にみる概念、文法用語の変遷
— Passive Voice に纏わる変遷について —

佐古敏子

1. はじめに

いわゆる「学習英文法」として定着した文法用語が斎藤秀三郎『新標準英文典（下）』[1]にみる訳語に負うものであることは周知のところではあるが[2]、我が国において、こうした英文法体系の研究を志したのは、はたしていつごろのことであろうか。

本稿では、幕末から明治初期にかけて幕府に献上、或いは刊行された訳述英文法書（英文典）において Verbs にみる文法範疇、殊に、Passive voice に纏わる概念が如何に受け容れられ、どのような訳語が宛がわれていたかを中心に、その変遷過程を調査、検討する。

さらに、上の検討結果を踏まえ、その類型を分析することで、現用語「受動態」が定訳となった斎藤文法に至るまでの「英学研究事始め」の一端を明らかにしたいと思う[3]。

併せて、Voice の「受動態」なる訳語が我が国で初めて扱われた訳述英文法書を推定すべく、検討を加えることが本稿の目的とするところである。

2. 先行研究とその問題点

当該期[4]における訳述英文法書に特化した先行研究としては、重久篤太郎（1932）をはじめとする竹村覺（1933）、勝俣詮吉郎（1936）、豊田實（1939）、井田好治（1968）、杉本つとむ（1993）、水野修身（2005）、岡田和子（2006）、飛田良文（2008）、そして朱鳳（2009）各氏の研究を確認することができる[5]。

しかし、筆者が調査した限りでは、その多くは文法用語についての一覧表作成に留まった研究に限られたものであり、Verbs 殊に、Passive voice の解説、例文(句)などの内容に

---

[1]日本人英学者による「学習英文法」として、初の完成版とされる斎藤秀三郎が著した英文典。
同じく『新標準英文典（上）』も参照されたい。共に、吾妻書房、1949-1950。

[2]上掲書（脚注 1）に関する伊藤氏（2000）による評価を以下に示す。斎藤文法にみる用語が定訳となったことを示す証左といえよう。
伊藤裕道「刊行 100 年斎藤秀三郎 *Practical English Grammar*(1898-99) を読む」(『日本英語教育史研究　第 15 号』、日本英語教育史学会、2000)　pp.113-132。
「日本人による本格的文法書として初めて登場し、（筆者により中略）今日の英文法学習にも斎藤文法（用語）が脈々と受け継がれていることを、（同：後略）」

[3]斎藤秀三郎、上掲書（脚注 1）p. 321。
以下、当該箇所を筆者により一部抜粋の上、引用する。
VOICE 態　191.
Transitive Verb.（他動詞）には、上述の通り、異なった用法が 2 つある:—
（Ⅰ)Active Voice　（能動態）として、Agent（行動主體）が Subject（主語）となる場合。
We must ***do*** something.（僕らは何かせねばならぬ）
（Ⅱ）Passive Voice　（受動態）として、Object of the Action（行動の客體）が Subject（主語）となる場合。
Something must ***be done***.（何事かなされねばならぬ）

[4]本稿において、研究対象とする幕末から明治初期を指す

[5]各先行研究の詳細については本稿【参考文献】を参照されたい。

踏み込んだ研究となると、先の井田好治、杉本つとむ、水野修身さらに、和蘭文法、日本語文法との関連も視野に入れて調査するも、飛田良文、斉木美知世、鷲尾龍一氏(2011) のほか、あまりなされていない。

したがって、筆者は主に、上掲の先行文献に基づき、詳細な調査、検討を行うものとなる。ただ、その中にあって、「英学黎明期」[6]とも称される当該期の各訳述英文法書と、それぞれの底本、或いは底本であろうとされる各原書との比較、照合に関しては、いずれも多くはなされていないことが明らかとなった。

よって、本稿では、さらに、訳述書と原書の両者における異同の有無に注視することに重きを置き、それぞれの Voice に纏わる解説、例文（句）について考察したいと思う。

3. 研究対象と研究方法

我が国の英学史上、幕府に初めて献上された最初の英和対訳辞典、文化 11 年（1814）『諳厄利亜語林大成』（以下、『語林大成』と略称）をはじめ、これより、およそ 30 年後に献上された、本格的な訳述英文法書、天保 11-12 年（1840-41）渋川敬直訳述、藤井資補訂『英文鑑』にみる Passive voice の分析を基軸として検討を試みる。

さらに、英学黎明期の所産ともいえる文久 2 年（1862）洋書調所から活字印刷された『英吉利文典』（俗称『木の葉文典』）並びに、その簡易辞書、慶応 2 年（1866）『英吉利文典字類』[7]の各英文法書にみる Passive voice の概念、訳語について比較、検討を行う。

くだって、明治に入り、我が国で本格的な英語教育が開成所において開始されるにことになった[8]。これに伴い、多くの英文法書（原本）が輸入されたが、本稿では慶応義塾で教材として用いられた『ピ子ヲ氏原板英文典』とその訳述書『ピ子ヲ氏原板英文典直譯（以下、『ピ子ヲ氏直譯』と略称)』 或いは、大学南校（開成所後身）で用いられた G. P. Quackenbos, *First book in English grammar* 並びに、訳述書『格賢勃斯氏英文典直譯（『格賢勃斯氏直譯』と略称)』、加えて Goold Brown, *The First Lines of English Grammar* と訳述書『ブラウン氏英文典直譯（『ブラウン氏直譯』と略称)』並びに、『ブラウン氏英文典直譯全（『ブラウン氏直譯全』と略称)』も検討視野に入れ、Passive voice の訳語、概念に纏わる解説、また、例文（句）に係る変遷について考察する。また、注目すべきは、上の各英文法書が正に蘭学から英学への言語学習の推移を示す貴重な言語資料と考え、この推移の中で一連の変遷について検討を行うため、和蘭文典より『訂正蘭語九品集』も研究対象に組み入れ、考察の上、本稿第 5 節で詳述する。

---

[6]諸説あるが、定宗数松『日本英学物語』三省堂（1939）によれば「フェートン号事件（1808）からグイ
ド・フルベッキ等が教鞭をとる開成学校設立(1870 頃)に至るまで」を「英学黎明期」と区分する。

[7]『英吉利文典字類』は所謂、文法書の体を成しておらず、『英吉利文典』の学習用簡易辞書とされるが、「英学事始め」と称される当該期にあって、各単語に簡易な品詞が添えられている点で、筆者は一種の英文法書と考え、本研究対象にこれを組み入れ、英文法書と同列に論じる。

[8]日本英語教育史学会編、『日本英語教育史年表 明治』（http://hiset.jp/n-meiji.htm2014 年 10 月 1 日の検索によれば、「明治 2 年（1869）1 月 開成所、授業開始（英語教師に英人パーリー（Parry を雇用」とある。

なお、上述した各英文法書、或いは和蘭文法書の書誌的情報については、同じく、第 5 節で詳細を確認されたい。

4. 英語史にみる Passive voice に纏わる史的発達とその定義[9]

本稿の研究テーマが、我が国で初めて扱われた Passive voice の訳述起源の探究であることから、その検討に入る前に当該期の英語史における Verbs 周辺、殊に Passive voice に纏わる史的発達とその定義について些かの把握が必須と考える。

よって、その手がかりとして、古英語(OE)期、並びに、中英語(ME)期に関する文法書から Henry Sweet (1891)の Passive voice に纏わる解説を引用の上、これを概観したい。

英語史上、何世紀頃に Passive voice なる文法範疇についての記述がなされたのであろうか。かつ、その定義として、どのような解説がなされたのであろうかを探る。

> The **passive voice**, and many forms of the active voice as well, are expressed by the combination of auxiliary verbs with the pret. partic. and, more rarely, the pres. partic. The chief auxiliary verbs are *wesan* ‘ be, ‘ *weorþan* ‘ become, ‘ (中略) as in *he* was gefunden, *he* wearþ gefunden ‘ he <u>was found</u>, ‘ (後略) (p.364)

(引用文中、太字、下線は筆者による)

上に引用した解説のくだりは、その著書 *ENGLISH GRAMMAR GOGICAL AND HISTORICAL* <VERBS Old-English 1181-1182>より抜粋したものであるが[10]、左記のタイトルが示す通り、< Old-English >についての記述であることから、スイートによるこの指摘は、OE 期（筆者註；西暦 700 年から 1100 年頃）において、Passive voice なる文法範疇、並びに、用語がこの期にあって既に用いられていたことを示す証左といえよう[11]。

ここで、上に示した見解について些かの検討を加えたい。スイートによれば、受動態は、助動詞‘ to be ‘の定形と動詞の過去分詞との結合により表されるのが一般的であり、その際、*he was gefunden, he wearþ gefunden* （= he was found,）の例にみるように、用いられる主な助動詞は *wesan* (= be)の定形、並びに、*weorþan*（= become）であるとした定義が確認され

---

[9]OED によれば、‘ Voice , ‘ 並びに、’ Passive voice ‘ について、以下の記述をみる。
Oxford Dictionary of English, Second Edition, Oxford University Press, 2001。
‘ Voice ‘ *Grammar* a form or set of forms of a verb showing the relation of the subject to one action: *the passive voice.* (p. 1971)。
‘Passive voice’ *Grammar* denoting a voice of verbs in which the subject undergoes the action of the verb (eg. *they were killed.as opposed to the active form he killed them.*, the opposite of **ACTIVE**)。

[10]Sweet, Henry *ENGLISH GRAMMAR GOGICAL AND HISTORICAL*, Oxford, 1891。

[11] Voice の起源に纏わる先行研究で、我が国における英学史の視点を基とした研究として、筆者は井田氏（1968）にみる論稿を知るに至った。
井田氏によれば、左記の論稿の中で、Voice の文法用語としての初出が 1382 年(筆者注；ME.(中英語期)の中頃)、Wyclif によるものであろうと推定されるという。以下、参照されたい。
「明治における英文法範疇・訳語の変遷」(『言語科学』第 4 号、九州大学言語会 1968)
Voice の文法用語としての初出例は、OED によれば、ずいぶん古いようであり、(例、1382 Wyclif Prol.57 A participle of a present tens, either preterit, of actifvois, either passif.), また文法上の問題点を多々含んでいるようであるが (Cf. Jespersen, The Philosophy of Grammar(ママ), Chap .XII) 明治英文法史上の一事実として記しておく。 (pp. 17 - 24)

よう。

これにより、筆者は Voice に二通りの形式が定着していたこと、つまり、今日でいうところの<be + 過去分詞>で示す statal passive 並びに、<become / get + 過去分詞>で示す actional passive の起源が、既に OE 期にあったことも、スイートは明示しているように思う[12]。

スイートによる上の指摘により、OE 期から ME 期の Passive voice に纏わる解説の一部について概観したが、次の第 5 節では本稿の研究テーマである幕末期から明治初期にみる訳述英文法書において Passive voice に纏わる概念がどのように受け容れられ、いかなる訳語、並びに、例文（句）が宛がわれていたかについて検討を行う。

筆者は、殊に、我が国に持ち込まれた英文法書（原書）とその訳述書を比較、照合することで、両書における異同の有無に注視して、さらなる検討を加えたい。

5. Passive voice に纏わる概念と訳語の変遷

ここでは、先に触れた英学黎明期における訳述英文法書、並びに、底本或いは、底本とされる原書について、編纂、刊行年度により、6 区分（5.1 から 5.6）に分類の上、Passive voice[13]の項を中心に調査、検討する。

上述の通り、当該期に持ち込まれた英文法書（原書）及び、その訳述書から当該箇所に関する解説部分を引用の上[14]、概念、訳語並びに、例文について比較、検討を行う。さらに、筆者が注目すべきと考える点等をこれに附した。なお、引用文中、太字、下線は筆者による。また、引用に当たり、長きに渡る原文については、筆者により省略の上、これを（中略）等で示す。

5.1 『諳厄利亜語林大成』について

5.1.1 *Groot Woordenboek der Engelsche en Nederduytsche Taalen* [15]　(1735)

---

[12]Henry Sweet による上掲書（脚注 15）の <VERBS Old-English 1181-1182>にみる解説（pp. 364-65）は、正に、宇賀治氏（2000）が指摘するところであろう。
以下、その概要（筆者による）である。参照されたい。
宇賀治正明『英語史』開拓社、2000。
英語の形態論（morphology）の歴史、とりわけ、動詞語尾屈折(conjugation)の歴史変化を辿れば、元来、ゲルマン語は動詞の屈折変化だけで今日の「受動態」の意を表していた（受動形）とされる。しかし、OE 期に入ると、能動態は特別の語形屋活用語尾をもたず、無標の語形で表され、他方、受動態もこの屈折変化が消滅し他の特定の動詞との結合による迂言的な形式、［beon/wesan（be 動詞）+ 過去分詞］」または［weorthan（become/Get に相当+ 過去分詞］による表現が一般的となった。したがって、OE では動詞の文法範疇(grammatical category)として①時制(tense)②法(mood)③人称　(person)④数(number)　4 種の文法範疇に加え、⑤相(aspect)と⑥態(voice)がありそれぞれに区分があったことがわかる。(pp. 204-207)

[13]先述の通り、本稿において、研究対象とした当該期に持ち込まれた原書には、passive verbs 並びに、passive voice の用語がみられた。よって、訳述英文法書では、その訳語として前者に「受動詞」「所動辞」が、後者には「受け方」「受動態」なる訳語が宛がわれている点に注視されたい。。

[14]筆者により新字体に書き換え、句読点を附した上、筆者による註を（筆者註：　）等とした。なお、引用箇所における下線、太字は筆者による。

[15]Sewel,W. *Groot Woordenboek der Engelsche Taalen,* Amsterdam, 1735。

【Werkwoorden / verbs】Lijdende werkwoord （passive verb）Of Verbs.

Actives betoken the doing of a thing, as *Onderwijzen to teach, Hooren to hear, Leezen to read.* **Passives** are such whereby a person or thing is moved or someway affected, as *Onderwijzen worden to be taught, veracht worden to be despised*. （p.53）

動詞の一種として Passive verb がある。Voice という文法範疇はここにはないものの、その概念については的確な解説がみられる。また、Active と Passive を対比させた適切な例文も確認できる。

5.1. 2『諳厄利亜語林大成』[16]（1814）

被動詞十丁表

又、**被動詞**なるものあり。是は他のために動かさるゝものにして、或は他に撃タレ呼ルゝ等他に處せらるゝをいふなり凡是等の動詞には必ず to 詞を冠らしめて用ゆ （六十四頁）

解説も例文（句）はすべて和文であり、英語での表記は一切、見受けられない。動詞の一種として被動詞があり、したがって、「受動態」という文法範疇はないものの、その概念について的確な解説があり、撃タレ呼ルゝの例もみられる。しかし、上掲書（5.1 1）でみた Active に纏わる概念、訳語並びに、対比させた例文もここにはない。

本書(5.1.2) の例と W. Sewel による原書（5.1.1）に挙げられた例としての語句を照合すれば、かなりの異同が確認されることから、先行研究では『語林大成』の底本が W. Sewel による *Groot Woordenboek der Engelsche en Nederduytsche Taalen* とされているが、この点で、筆者は些か疑問を呈したい。他の原書に依拠した可能性もあろうと推定したい。

5.1 3『訂正蘭語九品集』[17]（1817）

動詞之部

ljdende werkwoord 被動詞ト云フモノアリ　コレハ皆右ノ云フ

bedrijvendewerkwoord 動他詞ニ werkwoord 被ノ詞ヲ添エ云フモノナリ

被動、被作、被打、被殺

和蘭語 ljdende werkwoord と「被動詞」との併記がみられる。動詞の一種として扱い、

16本木正栄、馬場貞歴等譯編『諳厄利亜語林大成』、文化 11 年（1814）。（「長崎原本『諳厄利亜語林大成』研究と解説」1981 年)。ここで、井田氏による句読点、総振り仮名つきの上、新字体を用いた資料となっており、5.1 2 ではこれを引用した。

17馬場貞由譯編『訂正　蘭語九品集』、文化 14 年（1817）。

和蘭語 ljdende vorm 或いは stem なる範疇もなく、したがって、ここに「受動態」という文法用語もない。また、その概念についての解説もない。ただ、被動詞の例として、<被動、被作、被打、被殺>が確認するも、これに対比させた例としての語句もない。

5.2 『英文鑑』について

5.2 1 *English Grammar* (原本)[18] (1822)

> **A Verb Passive** expresses a passion or suffering or receiving of an action.and necessarily implies an object acted upon; necessarily implies an object acted upon, and an agent by which it is acted upon; I ***love*** Penelope. Penelope ***is*** [sic] ***loved*** by me. (p.70)

L. Murray による本書の重訳とされる後述の『英文鑑』、及び、本書を底本とした下の F. M. Cowan による *Engelsche Spraakkunst* (『英文鑑』の底本とされる) に示された文法用語、概念、また、その例文において、本書との間に大きな異同がみられる。

English Grammar では動詞の一種として Verb Passive があり、Voice という文法範疇はない。ただ、その概念については的確な解説がみられる。その例として I love Penelope. Penelope is loved by me とあり Verb Active と対比した例文を載せている。

5.2 2 *Engelsche Spraakkunst*[19] (底本) (1829)

> Het **Lijdende werkwoord** duidtaan, dat men iets lijdt of ondergaat; berijspt worden / to be reproved, gehast worden / to be hated. (p.44)

動詞の一種として Lijdende werkwoord の文法用語が確認されるものの、上記 5.2.1 と同じく、Voice という文法範疇はない。Lijdende werkwoord についての解説、また、その例文として *berijspt worden / to be reproved, gehast worden / to be hated.*が挙げられているが、これは底本とされる上掲書 *English Grammar* にみる例文 (句) との間に、大きな異同がみられる。

この点で、本書の訳者 F.M.Cowan が唯一、Lindley Murray による上記 5.2.1 の文法書を底本としたとする先行研究にみる見解について、さらなる調査が必要ではないかと筆者は考える。

5.2 3 『英文鑑』[20] (1840－41)

> [上巻　巻之五　動辞二]
>
> 所動辞ハ他ヨリ己ニ受ル事業ヲ言フ辞ナリ berijspt worden / to be reproved 異

---

[18]Murray, Lindley *English Grammar* London, 1822。

[19]Cowan, F.M. *Engelsche Spraakkunst,* Amsterdam, *1829*。

[20]渋川敬直譯述/ 藤井資補訂『英文鑑』天保 11－12 年 (1840－41)。

見サルヽ, gehast worden / to be hated.　嫌ハルヽ

品詞を示す文法用語に「詞」ではなく、「辞」が用いられているが、これは筆者が本研究対象とした訳述英文法書の中で唯一のものである。「『英文鑑』の特異性」[21]が指摘される要因の一つといえよう。

ここでも、同じく「受動態」という文法範疇はない。動詞の一種として「所動辞」なる用語があり、これが現用語「受動態」にあたると解される。ただ、概念についての解説、また、その例文(*berijspt worden / to be reproved, gehast worden / to be hated.*)については、ともに底本とされる上掲書 *Engelsche Spraakkunst* と全く一致する。

しかし、原本とされる *English Grammar*(5.2 2) との間には大きな異同がみられる。『英文鑑』が原書の英語版からではなく、蘭訳本からの重訳であるとする証左といえよう。

5.3『英吉利文典(木の葉文典)』について

5.3 1『英吉利文典(木の葉文典) 原本[22] (原題 *The Elementary Catechisms, English Grammar*) 』[23] (1865)

Lesson 43

Q. Are not some verbs called passive ?

A. Some verbs are called **passive**, but not properly so, as they do not become passive in meaning by inflection but by the addition of an auxiliary as —: I advised.—is **active**, but prefixing the word am, it is said to become **passive** ; thus—I *am* [sic] *advised*. (p. 41)

動詞の一種として passive (verbs called passive,) があり、ここでも Passive voice という文法範疇はない。しかし、その概念について的確な解説がみられ、また、active を示し、例文 I advised.と I am [sic] advised.を対比させている。

5.3 2.『英吉利文典字類』[24]　(1866)

篇中所用畧字　「處分」(凡例　二頁)

advised 規他動現過、知ラセシ 處分、知ラセラレタル　(二頁)

---

[21]『英文鑑』における文法用語の特異性（品詞分類に「詞」ではなく「辞」を用いたことをさす）については、杉本氏による次の指摘を参照されたい。

杉本つとむ『英文鑑—資料と研究—』ひつじ書房、1993 年。

「蘭学の伝統でほぼ定着したと思われる文法用語がここにみえないのである。」(pp.605~607)。

「こうした特異と思われる出所について先行の作品、すなわち、小関三英のものとかなり一致するところがあることが判明した。」(同書 p.624)。

[22]『英吉利文典（通称「木の葉文典」)』慶応元年（1865）（原題：*The Elementary Catechisms, English Grammar,* London, 1850）Q&A 形式による英文法書であるが各品詞についての簡略な解説に留まる。

[23]石原千里「The Elementary Catechisms, English Grammar, 1850—『伊吉利文典』、『英吉利文典』（木の葉文典）の原本」(『英学史研究』(40) 日本英学史学会、2007)。　(pp. 37-53 参照)。

[24]足立梅景譯編『英吉利文典　字類』、伊月村舎、慶応 2 年(1866) 。

本書は学習用簡易辞書として編纂されているため、例文は挙げておらず、各語の parts of speech, inflectional form を示し、上掲書『英吉利文典(木の葉文典) の例文より抜出した単語をアルファベット順に並べ、その訳に簡略な文法的註付がなされている。この点で、正に原本『英吉利文典(木の葉文典)」にみる parsing (梅景はこれを「部分(ケ)スルコト」と訳している) が配慮された画期的な辞書を呈しているといえよう。ただ、統語関係には触れていない。

ここに「受動詞」或いは「受動態」といった訳語について、いずれの記述もない。上の例で明らかなように、5.3 1 の例文から advised を一語を取り出し、これに文法的付注「處分」(筆者註：過去分詞) としている。

因みに『英吉利文典(木の葉文典) 』原本では、passive verbs の例として上記 5.3 1 にみる一例 (I *am* [sic] *advised*.) だけであったが、『英吉利文典字類』にみる「處分」の例 A a—aZ (ママ)に限り、筆者が調査した結果、他に、< acted 「處分」働カレタル、accented 「處分、音付ケラレタル>等の例もみられた[25]。

この点で、本書が『英吉利文典(木の葉文典) 』以外に依拠したであろう英文法書 (原本) の存在についても、さらなる調査の必要があると考える。

5.4『ピ子ヲ氏原板英文典直譯』について

5.4.1 慶応義塾読本『ピ子ヲ氏原板英文典』(原題 *Primary Grammar*) [26] (1869)

> PROPERTIES OF VERBS, Active and Passive Voices
>
> What is meant by the active voice of verb ?
>
> **The Active voice** is that form of a verb in which the nominative denotes the actor, as ' John *struck* James, ' where struck is the active voice.
>
> What is meant by the passive voice of verb?
>
> **The Passive voice** is that form of a verb in which the nominateve [sic] represents the suffer, or receiver of the action ; as 'James *was struck* by John, where was struck is the passive voice. (以上、p.90)

ここで、Voice を文法範疇としている点に注視されたい。筆者が本研究対象として調査した範囲ではあるが、当該期にあって、我が国に持ち込まれた原書の中で、初めて Passive voice なる用語が扱われた文法書と考える。文法用語に加え、当然、その概念について的確な解説、さらに、対比させた例文(John *struck* James. / James *was struck* by John,)も確認できる。

---

[25]他に、acquired 「處分」得ラレタル、added「處分」附ケ加ヘラレタル、agreed 「處分」一致サレタル、一致セシ、asked「處分」問ハレタル、が挙げられている。(同、三頁～六頁)。

[26]慶応義塾読本『ピ子ヲ氏原板英文典』尚古堂、明治 2 年 (1869)。

5.4 2 慶応義塾読本『ピ子ヲ氏原板英文典直譯』[27]

二百十章

他動態ハ アル　其ノ形デノ 動詞 於イテハ夫ニ　所ノ主格ガ表ス働者ヲ　譬エバ(飛車により中略) 於テ　**働キカケノ態**ニ ジョヌハ打チシゼ｜ムスヲ」何ガ　ルカ　顕ハサ　由テ　受動態ニ

受動態ハ アル　其ノ　形デノ動詞　於テハ ニ所ノ　主格ガ顕ワス受ケ者乃チ受者ヲノ　働キ　譬エバ　(中略)　於イテ　**受ケ身ノ態**ニ ゼ｜ムスガ打レシ由テジョヌニ　(六十四～六十五頁)

本書は解説、例文もすべて和文で記述されている、原語(英語)による表記は一切ない。ここで上掲の原書（5.4.1）にみる active voice, passive voice に「他動態」「受動態」なる訳語が宛がわれた事実に大いに注目したい。現用の訳語である「他動態」「受動態」を確認した。

よって、当該期、我が国における訳述英文法書で、初めて「態」なる訳語を用いた文法書が、本書（5.4 2 慶応義塾読本永嶋貞次郎訳『ピ子ヲ氏原板英文典直譯』）であろうと、筆者は推定するものである。

さらに、Voice に纏わる概念の解説、これも原文と同じである。加えて、原文と同じく、対比した例文の訳例にジョヌハ打チシ / ゼ｜ムスヲゼ｜ムスガ打レシ由テジョヌニを挙げている点も大いに注視されたい。

ただ、ここでは Passive voice に、現用の定訳となった「受動態 / 受ケ身ノ態」という訳語を宛がっているものの、Active voice の訳語が「他動態 / 働キカケノ態」であり、現用語の「能動態」が使われていない。些か疑問である。

また、筆者はこの点に加え、訳述者である永嶋貞次郎が以後、定訳となった「態」なる訳語をそもそも、どのように案出したのか。その根拠となるべく、依拠した文典はいかなるものであったのか。この点についても、上の疑問と併せて検討が必要と考えるが、これについては、さらなる調査に委ね、別稿を期したいと考える。

5.5『格賢勃斯英文典直訳』について

5.5.1 *First book in English grammar*　(原本) [28]　(1875)

CHAPTER VI - OF VERBS

The subject of a transitive verb may be represented in two ways：—

When its subject is represented as acting, the verb is said to be in **the Active voice**. When its subject is represented as acted upon, the verb is said to be in

---

27永嶋貞次郎譯慶応義塾読本『ピ子ヲ氏原板英文典直譯』、尚古堂、明治 3 年（1870 年）解説並びに、例文（句）とも片仮名交じりの和文だけで、英文での記載はない。また、日本語の下に読み下しの順を示す漢数字が付されているが、筆者により省略。

28Quackenbos, G. P. *First book in English grammar*, New York, 1875。

the Passive voice.

1. as acting (the Active Voice); Bees *make* honey.

2. as acted upon (the Passive Voice); Honey *is made* by bees. (p. 54)

本書においても、先の『ピ子ヲ氏原板英文典』(5.4.1) と同じく、Voice なる文法範疇が確認され、同じく Passive voice なる用語が扱われていることがみてとれよう。また、その概念についても的確な解説、さらに、明確に対比させた例文 (Bees *make* honey.並びに、Honey *is made* by bees. も挙げられている。

5.5.2『格賢勃斯英文典直譯』[29] (1870)

Lesson XLII 第四十二ノ課

第一ニハ**働キカケ**トシテ○ " Bees *make* honey.蜂ガ造ル蜜ヲ " 第二ニハ**働キカケルヽ**トシテ" Honey *is made* by bees. 蜜ガルヽ造ラ蜂ニヨリテ " 移リ行ク働詞ノ此等ノ形チ造リガ如何ニ差別サルヽカ其レノ主ガ働キカケトシテ顕サルヽトキニ働詞ガ**働キカケノ仕方**ニ於イテ顕ハサルコトト言ハルヽ 其ノ主ガ働キカケラルヽトシテ顕サルトキニ働詞ガ**受ケ方ノ仕方**ニ於イテアルコトト言ハル

(五十六頁)

本書では、「動詞」ではなく「働詞」を宛がっている点に注視されたい。上の引用文に先立ち、動詞分類に触れているが、そこでは「移リ行ク働詞」、「移リ行カサル働詞」そして「一人働詞」の三種に分類され、その上で、「移リ行ク働詞」には、「働キカケノ仕方」、「受ケ方ノ仕方」の二種があるとしていることを付記したい。

ここでも、解説の内容は原文とまったく同じである。記述は全文、片仮名交じりの和文だけであるが、ただ、その例文では原語(英語)が用いられ、それに片仮名交じりの訳文が附記されている。なお、例文も原文と全く一致したものである。

しかし、原文に Verb ではなく Passive voice なる術語が使われているにも拘らず、ここでは「働キカケノ仕方」「受ケ方ノ仕方」なる訳語が与えられ、「態」という訳語は用いられていない点に注視したい。文法範疇としてではなく、原文中にみる ways から、用法として捉えた結果に案出した訳語ではないかと考えられよう。

5.6『ブラウン氏英文典直譯』について

5.6.1 *The First Lines of English Grammar* (原本) [30] (1877),

Verbs are divided again, with respect to their signification into four classes ; active-transitive, active-intransitive, passive, and neuter.(筆者により中略)

A passive verb is a verb that represents its subject, or nominative, as being acted upon; as, I *am compelled*. (p. 39)

---

[29]大学南校助教譯『格賢勃斯英文典直譯』明治 3 年 (1870)。本書のほか丸山作楽『格賢勃斯譯英文典 上、中、下』盤之屋、書写年不明、『格斯氏英文典独学』がある参照されたい。

[30]Brown, Goold *The Grammar of English Grammars* New York, 1877。

ここでは Voice という文法範疇はない。Passive verb なる用語が宛がわれているものの、その概念については的確に解説されている。しかし、Passive verb に対応する Active verb の記載がなく、当然、Passive verb の例文 I am compelled. に対比する例文もない。

5.6.2 中西範譯『ブラウン氏英文典直譯』[31]（1884）

> **受動詞**ハ動詞デアルソレハ働キ掛ケラルヽ了(筆者註：事)トシテ、ソレノ主詞或ハ主格ヲ表ハス｛處ノ｝動詞デアル　<u>I *am compelled.* 私ガ ラルヽ 強ヒ</u> ノ如シ」
>
> （百三頁）

原文（5.6 1）の A passive verb に対応して「受動詞」なる訳語が宛がわれている。当該期の訳述書に倣い、解説、例文の内容は原文とまったく同じであるが、その記述は全文、片仮名交じりの和文だけで、英文での記述はない。ただ、本書においても、唯一、例文では原語(英語)が用いられ、それに片仮名交じりの訳文が附記されている。

上掲書（5.6 1）にみる原文の中で A passive verb に対応する An active verb なる文法用語の記載がなく、当然、その訳述書である本書『ブラウン氏英文典直譯』においても、「受動詞」に対応する訳語（現用の「能動態」に当たる用語）の記載がなく、したがって、「受動詞」の例文 I am compelled.に対する例文も確認できないことになる。

5.6.3 源綱紀譯述『ブラウン氏英文典直譯全』[32]　（1886）

> 其レ**受働詞**ハ働キヲ表出スル了ヲ理会セザル可カラズ　併シ乍ラ働キハ受ケ綱.読（ママ）ニ依テ行レザルナリ<u>我ハ強ラル</u>　（百四十七頁）

上の原文(5.6.1)にみる A passive verb に対応して、ここでは「受働詞」なる訳語が宛がわれている。ただ、中西範譯（5.6 2）の「受動詞」と異なり、「動」に「働」という文字を用いていることに注視されたい。

また、当該期の訳述書に倣い、解説と例文内容は原文と同じであり、その記述は全文、片仮名交じりの和文だけである点は中西範譯の上掲書（5.6 2）と同じである。

しかし、ここでは、例文でも原語(英語)が用いられず、原文の例文（<u>I *am compelled.*</u>）の記載がない。片仮名交じりの和文（<u>我ハ強ラル</u>）で表記されており、この点が中西範譯と大きく異なる。さらに、中西範譯（5.6 2）と同じく、「受働詞」に対応する文法術語（現用の「能動態」に当たる用語）の記載がなく、したがって「受働詞」の例文 I *am compelled.* に対比する例文（片仮名交じりの和文による例文）も確認できない。

以上の調査から、当該期に我が国へ持ち込まれた英文法書（原本）[33]において、Verbs の

---

[31]中西範譯『ブラウン氏英文典直譯』二書房、明治 17 年（1884）。

[32]源綱紀譯述『ブラウン氏英文典直譯全』的場文林堂、明治 19 年（1886）。

[33]当該期の英文典は表題のみ日本語で書かれてはいるものの、覆刻本を指すものである。よって、本文はすべて英語である。

文法範疇とは切り離され、別の文法範疇として Voice (Active voice, Passive voice) が初めて明記されたのが本稿、5.4.1.で検討した T.S Pinneo による *The Primary Grammar* であり、併せて、訳述英文法書で「受動態」の概念、訳語が我が国で初めて扱われたのが、同じく、5.4.2 で考察した明治 3 年(1870 年)に刊行の永嶋貞次郎譯、慶応義塾読本『ピ子ヲ氏原板英文典直譯』と筆者は推定するものである。

6. 検討結果

第 5 節でみた調査結果から、本稿で明らかにすべく Passive voice に纏わる概念、訳語についての類型は次の 4 タイプに分類されよう。

まず、第一類型に、動詞分類に係るものとしての記載が一切ないタイプである。したがって、Voice の概念、その訳語について何ら触れていない。つまり、動詞分類と切り離し、単に分詞（Participle）として扱う足立梅景譯編『英吉利文典字類』(1866) の「處分」がこれに当たる。

第二類型は、Voice という範疇、その概念の記述もなく、したがって、現用の訳語「受動態」も扱われていないタイプである。動詞の一種として扱う英文法書がこれに当たる。馬場貞由譯編『訂正蘭語九品集』(1817) の「被動詞/所動詞」、本木正栄等譯編『語林大成』(1814) にみた「被動詞」である。

さらに、第三類型には、Voice という概念について触れているものの、「受動態」という現用の訳語はなく、動詞の一種として扱っているタイプとして、渋川敬直譯述『英文鑑』(1840-41)の「所動辞」、中西範譯『ブラウン氏英文典直譯』(1884)にみる「受動詞　ウケミ」であり、また、源綱紀譯述『ブラウン氏英文典直譯全』(1886)の「受働詞」が挙げられる。

最後に、第四類型として、Voice に纏わる概念、その訳語として現用語の「受動態」についても、明確な記述がなされているものとして、永嶋貞次郎譯『ピ子ヲ氏原板英文典直譯』(1870)の「受動態」がこれにあたる。また、大學南校助教譯『格賢勃斯氏英文典直譯』（1870）にみる「受方ノ仕方」、並びに、「受動態」なる訳語ではないものの、「動詞」とは別の文法範疇として受け容れたであろう大學南校助教譯『格賢勃斯氏英文典直譯』(1870)にみる「受方ノ仕方」も、これに準ずるものとみなすことができよう。

以上、類型に纏わる分析結果から、当該期に輸入された英文法書(原本)のうち、Passive verbs ではなく、Passive voice が初めて用いられたのは慶応義塾読本『ピ子ヲ氏原板英文典（*Pinneo's Primary Grammar*）』(5.4 1)及び、G.P. Quackenbos, *First book in English Grammar,* (5.5.1)であることが判明した。

しかし、その訳述英文法書については、ここで、若干の検討加えたい。上述の原本 G.P. Quackenbos, (5.5.1)では、確かに Passive voice なる文法用語が初めて用いられた原書の一つではあるもの、その訳述書である大學南校助教譯（5.5 2）においては、「受動態」ではなく、訳語「受方ノ仕方」となっていた。これは当該期にあって、その概念は把握され

ていたことが明らかにみてとれるものの、その訳が今日の定訳の前身とは言いがたい。

一方の原本 *Pinneo's Primary Grammar* (5.4 1)の訳述書である永嶋貞次郎譯 (5.4.2)において、「受動態」が初めて扱われていることを注視すれば、今日、定訳となった「受動態」なる訳語の訳述起源が正に、慶応義塾読本『ピ子ヲ氏原板英文典直譯』であると筆者は考える次第である。

本稿の中で検討を試みた各訳述英文法書において、Passive voice に纏わる概念、訳語を巡り、些かの誤謬が見受けられたが、これは当時、我が国が「英学事始め」という黎明期にあった英語受容の背景を考慮すれば、避けられない結果であろうことも、付記したい[34]。

7. おわりに

本稿を結ぶに際して、研究テーマとした Passive voice に「受方ノ仕方」の訳語を用いた『格賢勃斯氏著英文典直譯』(5.5 2) より 10 年以上も前、明治 3 年に、永嶋貞次郎が慶応義塾読本『ピ子ヲ氏原板英文典直譯』の中で、Passive voice の概念を十分把握しており、「受動態」なる訳語を既に用いていた事実を大いに評価したい。

本稿<はじめに>で触れた斎藤英文法にみる「受動態」の訳述起源がここにあり、定訳に至ったのではないかと推定するものである。

しかし、先に (本稿 5.4) 疑問を呈したように、永嶋貞次郎譯による上掲書『ピ子ヲ氏原板英文典直譯』では、「受動態」に対応した訳語として「他動態 / 働キカケノ態」が宛がわれ、現用語の「能動態」が使われていないことが明らかとなったことから、「受動態」に対する定訳「能動態」が我が国で初めて現れたのは、どの訳述英文法書であろうかといったことが今後の課題と考える。

本稿で明らかにすべく研究対象は、主に、幕末から明治初期における訳述英文法書であるが、調査を進める過程で、これに加え、筆者は『ブラウン氏英文典直譯』明治 17 年 (1884) 並びに、『ブラウン氏英文典直譯全』明治 19 年 (1886) の訳述英文法書までをその対象としたが。結果、そのいずれにも現用語の「能動態」なる訳語は確認できないのである。よって、研究対象をさらに明治 20 年以降に拡げ、その訳述起源を究明したいと考える。

さらに、『ピ子ヲ氏原板英文典直譯』の訳述者、永嶋貞次郎が元来、「態」なる訳語をどのようにして案出したのであろうか。また、案出の過程で依拠したであろう和蘭文法書等の存在についての究明も同じく今後の課題であり、別稿を期すべく、調査、検討を行っている。

【参考文献】

Lowth, Robert *A Short Introduction to English Grammar,* LONDON, 1762

Sweet, Henry *ENGLISH GRAMMAR GOGICAL AND HISTORICAL,* Oxford, 1891

[34]本稿の中で調査の結果、4 つの類型が混在していたことが判明したが、これは、「態(Voice)」というものの、形態、性質、統語的特徴が同じ動詞 Verb から派生したことで、その共通性、類似性に束縛され、動詞分類から分離し得なかった状況がこうした結果に反映したのではないかとも考えられる。

Oxford Dictionary of English, Second Edition, Oxford University Press, 2001

井田好治　「明治における英文法範疇・訳語の変遷」(『言語科学』第４号、九州大学言語会 1968)
「薩摩の英学（三)」(『英語英文学論叢』第２０集、九州大学、1970)
「『諳厄利亜語林大成』の英文法論について」(日本英学史学会編『英学史研究』第８号、1975)
「日本の初期英語辞典(英語の辞書<特集>－理論と実際)」(『英語青年』127号、研究社出版、1981)
「長崎原本『諳厄利亜興学小筌』『諳厄利亜語林大成』の研究」(『長崎原本研究と解説－』日本英学史料刊行会編、大修館書店、1982)
『日本英学史論選集』日本英学史学会、1924

宇賀治正明　『英語史』開拓社、2000

岡田和子　「蘭・英・獨語学における文法用語の成立と変遷（Ⅶ)」(『外国語教育論集』第 26、筑波大学外国語センター、2004)
「『和蘭語法解』の原典は Peyton の英文法書か」(『外国語教育論集第 28 号』筑波大学外国語センター、2006)

勝俣詮吉郎　『日本英學小史』研究社、1936

斉木美知世、鷲尾龍一共著
「Lijdend /Passive の起源」(『人文 10』、学習院大学出版、2011)

重久篤太郎　『江戸英学史の片影』同志社高等商業学校商業研究会 1932
『日本近世英学史』教育図書、1941

朱鳳　「馬禮遜的漢訳西書封日本的影響」(『アジア分化交流研究』第３号、2008)
『モリソンの「華英・英華字典」と東西文化交流』白帝社、2009

杉本つとむ　「小関三英に関する覚書」(『国文学研究』40、早稲田大学国文学会、1969)
『日本英語文化史の研究』八坂書房、1985
『英文鑑―資料と研究―』ひつじ書房、1993

高梨健吉　『日本の英語教育史』大修館書店、1975

豊田實　『日本英学史の研究』岩波書店、1939

飛田良文　「「英文典直訳」と欧文直訳体(<特集>資料研究の現在」(『日本語の研究 4(1)』日本語学会、2008)

水野修身　「明治期英文典における ’Voice‘ をめぐる訳語に関する考察」(『防衛大学校紀要(人文科学分冊）第九十一輯』) 2005

若木太一　『辞書遊歩：長崎で辞書を読む』九州大学出版会、2004